

兄弟っていいな

川口 晴輝
かわぐち はるき

ぼくには、四才はなれた妹がいる。妹が生まれるまでは、兄弟がうらやましく思っていた。ぼくも、兄弟がほしかった。

ある日、お母さんと一緒にねると、トクントクンと聞こえたんだ。目をさますと、何も音はしない。またねると、小さな丸が見えたんだ。その中でトクントクンと聞こえる。何でか、赤ちゃんだと思ったんだ。

次の日、朝一番に「赤ちゃんいるよ。今、これくらい。」と指で小さな丸を作ってお母さんに知らせた。お母さんは笑って何も言わなかったけど、夕方ビクリ顔をしたお母さんが「赤ちゃんできてた。」と言った。ぼくはうれしかったし、はずかしかった。

ぼくは、よく赤ちゃんの夢を見た。丸の中で、だんだん大きくなる赤ちゃん。かわいい女の子。だけど、お母さんが言ったんだ。「なかなかチンチン見せてくれないから、男の子か女の子かわからない。」って。だからぼくは教えた。「女の子だよ」って。

しばらくして、赤ちゃんは女の子だった。ぼくが話せば、お腹をけって返事をしてくれる。ぼくがお腹をさわると、ポコポコ動く。そんな元気な妹が生まれ、ぼくは、お兄ちゃんになった。

妹が生まれた一年後、またトクントクンと聞こえたんだ。次は元気な男の子。とんでもなく大きく成長した弟が生まれた日、ぼくは二人のお兄ちゃんになった。

お兄ちゃんになってから、ぼくのジゴクの日々が始まった。何でも後回しにされ、あまり相手にされなくなった。すぐに、「お兄ちゃんなんだから。」と言われる。でもね、ぼくまだ子供なんだよ。だから、たまにはあまえないんだ。

妹と弟が大きくなると、ぼくは二人のおモチャになってしまった。たたかれたり、かみの毛をひっぱられたりする。はじめはいたくて泣いたんだ。だけど、それを見て笑う二人の笑顔がかわいくて、がんばってしまう。そしていつの間にか、やさしいお兄ちゃんになってしまった。

妹と弟が生まれて、ぼくは二人がいらなと思うた事もあった。だけど、今は三人一組。何するにも、どこ行くにも、三人一組。そしてぼくが先頭に立つ。

兄弟って意外といいな。ぼくをお兄ちゃんにしてくれた妹と弟に、ありがとう。